確かな国語力の育成

－真の学びをつかむ、国語科の学習指導法の研究－

高知市立愛宕中学校　教諭　松岡マミ

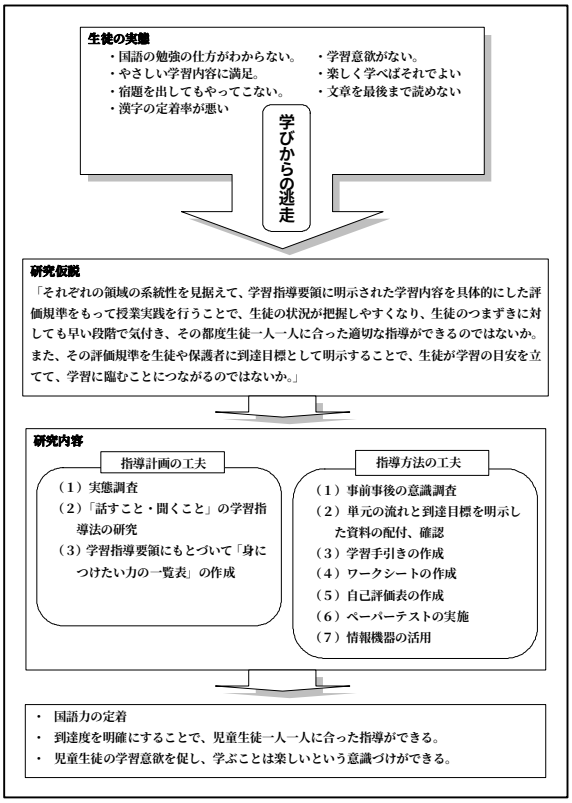
学校生活において、「学びから逃走」する生徒が増えているように見えていたが、実態調査の結果からは、内面には、「学びたい」という意欲を持っている生徒が多いことが分かった。その気持ちに応えるためには、教師の指導力と学習指導法の工夫は必至である。そこで、生徒に確かな国語力を育成するために、「話すこと・聞くこと」の領域で学習指導法の研究を行った。中学校３年間の系統性を見据えて、学習指導要領に示された学習内容を具体的に示した評価規準を、到達目標として事前に生徒に明示することで、学ぶ内容を明確にすることができ、生徒の学習意欲や学習活動を促し、確かな国語力の育成につなげることができた。

キーワード：系統性、到達目標、発達段階、学びからの逃走、「話すこと・聞くこと」

1　はじめに

土佐の教育改革の大きな柱の一つに、「子どもたちの基礎学力の定着と学力の向上」があげられている。その基盤をなすものが国語力であると考える。国語力というのは、特別なものではなく、社会生活に必要な、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の力であると考えている。その国語力を定着させる指導法について考える毎日である。

これまでの実践を振り返ってみたとき、どの生徒も皆公平に「学習内容を理解したい」という意識をしっかり持っていることを強く感じた。だが、その当たり前の気持ちに十分に応えてあげることができていない。社会生活において不自由しない学力をつけて卒業してほしいと願い指導しているが、現実問題としては、十分な基礎学力をつけないままで卒業する者もいる。この問題を突き詰めていくと、指導者としての責任を果たしていないことになる。また、昨今、問題行動を起こす生徒のみならず、全体的に勉強をしない生徒の層が厚くなってきている。その原因として考えられることは、生徒を取り巻く環境が、以前に比べて格段に変化したことがあげられる。世の中が豊かになり、生徒の学習への集中力がそがれる刺激的な要因が多く存在し、また社会的にも勤勉や努力というものに対する評価が低下してきている。さらに、何事に対しても要領よくこなすことが「格好いい」とする価値観が定着しつつある。学習に関しても、家で予習や復習をする子どもたちは少なく、自発的に勉強する姿勢はあまり見られない。このことについては、2004年に発表されたTIMSS調査からも日本の児童生徒は、調査国中、宿題をする時間が最も短く、約１時間しかないという結果が出ている。このような生徒に、学ぶことは楽しいと意識づけるには、教師の指導力と学習指導法の工夫は必至である。そこで、確かな国語力を育成する学習指導法の研究を、「話すこと・聞くこと」の領域で探求していくことにした。



研究構想図

2　「話すこと・聞くこと」の領域で研究を行った理由

現行の学習指導要領では、これからの生徒たちには「伝え合う力」が特に必要と考えられ、明記されている。「伝え合う力」とは、適切に表現する能力と正確に理解する能力とを基盤に、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉によって関わり合う力のことである。このような「伝え合う力」が示された背景には、国際化、情報化が進み、社会の状況がめまぐるしく変化してきていることや、限られた狭い範囲内や同じ感覚を共有する仲間内での会話はできても、改まった場や大勢の人の前では、自分の考えを相手に伝えることができないなどの実態が考えられる。このような現状を受け止め、生徒の能動的な「話すこと・聞くこと」の活動を促す効果的な指導の工夫を行わなければならないのだが、「話すこと・聞くこと」は、あまりに日常的で広範囲であるため、発達段階に応じた指導の明確化が難しい。そのため、学習指導要領に示された内容を、できるだけ具体的な目標として生徒に示し、指導していく必要がある。そうすることで、社会生活において必要な、生きて働く言葉の力を中心に据えて、「伝え合う力」を高めることができると考えたのである。

3　研究仮説

領域のそれぞれの系統性を見据えて、学習指導要領に明示された学習内容を具体的にした評価規準をもって授業実践を行うことで、生徒の状況が把握しやすくなり、生徒のつまずきに対しても早い段階で気付き、その都度生徒一人一人に合った適切な指導ができるであろう。また、その評価規準を生徒や保護者に到達目標として明示することで、生徒が学習の目安を立てて、学習に臨むことにつながるであろう。

4　研究内容

（1）理論研究

①　国語科における「基礎・基本」の確認

様々な資料や文献にあたり、国語科における「基礎・基本」のとらえ方や定義づけを確認し、今後の研究の方向性を探った。

②　小・中学校の学習指導要領の系統性の整理、把握

学習指導要領の「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「言語事項」の三領域一事項の目標・内容を整理して系統表を作成し、内容の把握に努めた。

（2）実態調査（国語の学習に関する意識調査）

①　目的

社会の変化とともに、児童生徒を取り巻く環境や価値観が大きく変わり、児童生徒の学習に向かう姿勢も変化してきているなか、児童生徒が、国語の学習にどれだけの意欲をもって取り組もうとしているかを把握し、授業改善に生かすことを調査の目的とした。

②　方法

「国語の学習に関する意識調査」を行うために、「平成１７年度　学力向上のための基礎調査」の「関心・意欲・態度」の結果を分析した。分析の方法としては、まず、国語の３領域における「関心・意欲・態度」をＣＲＴの選択肢別反応率表から取り出し、次に、それぞれの質問項目に対する回答を学ぶ意欲が「高い」、「低い」の二つに整理した。質問項目に対して、少しでも国語を学ぼうとする意欲が読み取れる選択肢を選んでいる場合は、学ぶ意欲が「高い」として扱った。最後に、時系列にまとめた。

③　結果

児童生徒を取り巻く環境が変化しても児童生徒は、内面に「学習内容を理解したい」という気

持ちを持っていることが明らかになった。特に中学生になると約７割から９割を越える生徒が学習意欲を持っていることが分かった。これらの分析から、児童生徒の「学びたい」と思う気持ちに応えるためには、教師の指導力と指導の工夫が最も必要とされていることを再確認することができた。

（３）「身につけたい力一覧表」の作成と活用（「話すこと・聞くこと」）

①　作成の目的

ア　学習指導要領に示された内容を具体的にして分かりやすい目標として明示するため。

イ　系統性を見据えて発達段階に応じた指導ができるようにするため。

ウ　ア、イを行うことで、「実の場」の位置付けを明確にするため。

②　作成にあたっての留意事項

ア　学習指導要領の目標・内容に基づいて作成した。

イ　発達段階を考慮しつつ、効果的、段階的に指導することができるように、小・中学校、各学年に分けて、作成した（図１）。

ウ　各学年で最も重点的に身につけたい力は★、重点的に身につけたい力は☆として作成した。

エ　「身につけたい力」の目標に到達した児童生徒には、さらに次の段階の力を身につけるように指導し、目標に達していない児童生徒には、その児童生徒が持っている力の段階から、指導ができるようにと、一人一人の生徒に合った適切な指導（個に応じた指導）ができるように工夫した。

オ　発達段階に応じた指導計画を立てる際に役立つなど、学校現場で生かすことができる内容になるように工夫した。

身につけたい力一覧表

★最も重点的に身につけたい力　☆重点的に身につけたい力

話すこと	小学校						中学校		
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
聞き手を見ながらはっきりと大きな声で話すことができる。	★	★	★	★	☆	☆	☆	☆	☆
簡単な会話を主述の関係で話すことができる。	★	☆							
身近な人に自然に思いを伝えることができる。	★	☆							
思ったことや聞き取り持ったことを進んで楽しく話すことができる。	★	★	☆	☆	☆	☆			
はっきりとした正しい発音で話すことができる。	★	★	★	☆	☆	☆	☆	☆	☆
「です」「ます」をつけて終わりまで話すことができる。	★	☆							
姿勢や口形などに注意して発音することができる。	★	★	★	★	☆	☆	☆	☆	☆
経験した事柄の順序を考えて話すことができる。	★	★	☆	☆					
絵や実物や（情報機器）などを活用して話すことができる。	☆	☆	☆	☆	★	★	★	★	★
身振りや手振り、表情を入れて話すことができる。	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆	☆
相手や場に応じて、声の大きさや速さを工夫することができる。	☆	☆	★	★	★	★	★	☆	
聞きやすいように、区切りを考えて話すことができる。		☆	☆	☆	☆	☆	☆		
主述の関係に接続語を入れて話すことができる。		★	★	★					
内容の経緯をつけて話すことができる。		★	★	★					
筋道を立ててはっきり話すことができる。				★	★	★	★	★	★
話しの要点が分かるように区切りを考えて話すことができる。				★	☆				
伝えたい事柄を整理して話すことができる。				☆	☆	☆	☆	☆	
必要な事柄が何かを考えて話すことができる。				★	★	★	★	☆	☆	☆
相手や場に応じて、丁寧な言葉で話すことができる。				★	★	★	★		★	★
相手や場に応じて、敬体と常体の表現を使い分けて話すことができる。				★	★	★	★	★	★	☆
事柄の順序を考えながら、はっきり分かるように話すことができる。				★	★	☆	☆	☆		
伝えたいことをまとめて話すことができる。				★	★	☆	☆			
最も伝えたい中心点が分かるように話すことができる。				★	★	★	★	★	★	
感想と意見を分けて、はっきり分かるように話すことができる。				★	☆					
機械や例の言い方に注意して話すことができる。				☆	☆	★	★	★	★	☆
言葉の抑揚・強弱・アクセントを工夫して話すことができる。				☆	☆	★	★	★	★	★
語尾まではっきりと話すことができる。				☆	☆	★	★	☆	☆	☆
声の調子や間に注意して話すことができる。				☆	☆	☆	☆	★	★	★
メモをもとにして話すことができる。				☆	☆	☆	☆			
事実と感想、意見との関係が分かりやすくなるように組み立てて話すことができる。						★	★	☆	★	★
接続語や指示語を正しく使って効果的に話すことができる。						★	★	☆		
結論や山場の位置（リサなどを効果的に工夫して話すことができる。						★	★	☆	☆	
意図をはっきりさせ、根拠を明らかにしながら話すことができる。						★	★			
全体の構成を考え、説明の順序を考えて話すことができる。						☆	☆	★	★	★
相手や場に応じて、誘導力を持たせて話すことができる。						☆	☆	★	★	★
イントネーション、プロミネンス、声の調子を考えて話すことができる。						☆	☆	★	★	★
聞き手とアイコンタクトをとって話すことができる。						☆	☆	☆	☆	☆
論理の展開を工夫して話すことができる。						☆	☆	☆	★	★
自分の考えや気持ち、立場などを整理して話すことができる。								★		
相手の立場や話す場面を想定して話すことができる。								★		
事象と感想・意見の関係が分かりやすいように話すことができる。								★	★	
要旨が明確になるように、構成を工夫して話すことができる。								★	★	★
事実と意見を区別して話すことができる。								★	★	★
相手に分かりやすく伝えるために、話の構成を考えて話すことができる。								★	★	
自分の考えや気持ちを伝えるために、ふさわしい語彙を選んで話すことができる。								★	★	
伝えたい事柄のポイントを記したメモをもとにして話すことができる。								★	☆	☆
自分の主張とそれを支える根拠に基づいて反論や説得的意見を予測した上で話すことができる。									★	
自分の話の構成や展開について工夫することができる。									★	★
ポイントを記したメモをもとに、適切な語句を言い換えて話したり質問したりすることができる。									★	★

図１　身につけたい力一覧表

５　検証授業

（１）指導計画

検証授業を行うにあたっては、系統性を意識して、１年生から３年生までそれぞれの学年の発達段階に応じた学習内容で指導計画を立てた。その授業構想図（図２）は４ページに示した通りである。また PDCA のサイクルで検証授業を実施した（図３）。

①　第１学年（５時間）

とりとめのない「おしゃべり」で、話すことの楽しさを体験させ、「相手の話をしっかり聞き、受け止める」姿勢や「自分の意見を相手に理解してもらう」喜びを会得させたいと考えた。

さらに、意見を持つ人を「演じる」という討論劇を行った。これは、人前で発言することに消極的になりがちな気持ちを少しでも取り除くために行うものである。意見を持つ人を「演じる」という体験からは、「自分の意見を述べる大切さ」や「相手の意図を考えながら聞く大切さ」に

気づくことができる。また、発展的な「対話・討論」の学習の基礎固めのうえでも、より有効な方法であると考えた。中学生がもっとも関心をよせて討論劇ができるように、テーマは、「携帯電話は中学生に必要か」という内容で設定した。

② 第２学年（５時間）

２年生においては、更に段階を進め、互いの立場や考え方を尊重し、言葉による伝え合いを効果的に指導していく必要がある。したがって、「伝え合う」学習の方法として「討論ゲーム」（ディベート）を用い、目的や方向に沿って効果的に話したり、相手の意図を理解しながら聞いたりする能力を育成したいと考えた。テーマは、「携帯電話は中学生にとって必要である」という内容で設定した。

③ 第３学年（５時間）

中学生最後の「対話・討論」の学習のまとめとして、結論や解決策を生み出す「討議」を「パネルディスカッション」という方法で行った。「パネルディスカッション」は、立場を明らかにし、聞き手を意識して自分の考えを論理的に述べるだけではなく、異なる立場の考え方を受け止めながら話し合うという「伝え合う力」を育成するのに適した教材であると考える。テーマは、「携帯電話をよりよく利用するにはどうしたらよいか」という生徒たちの身近な問題で設定をした。生徒自らが携帯電話を通して起こる問題に気づき、解決策を見出すことをねらいとした。

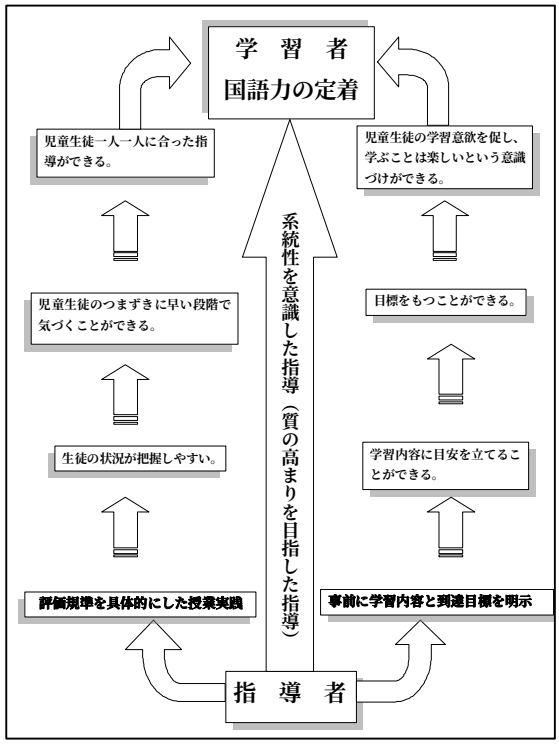


図２　授業構想図

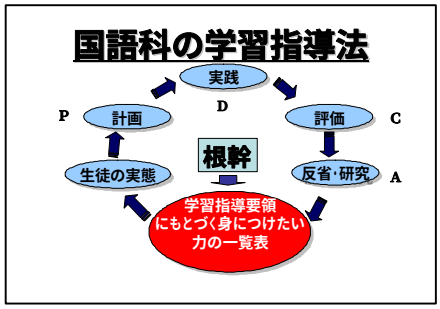


図３　国語科の学習指導法

（２）発達段階に応じて重点を置いた到達目標

「話すこと」、「聞くこと」、「話し合い」のそれぞれの内容において、各学年ごとに発達段階に応じて重点を置いた到達目標を設定した。

	中１	中２	中３
話すこと	立場をはっきりさせ、話し手に理解してもらうように発言することができる。	論理の展開を工夫して、話すことができる。	発言が説得力を持つように意見と根拠、共通点と相違点などを区別しながら話すことができる。
聞くこと	話し手の意図を考えながら聞くことができる。	主張とそれを支える根拠との関係を考えながら聞くことができる。	相手の立場や考えを尊重しながら、相手の意見と根拠、共通点と相違点などを区別しながら聞くことができる。
話し合い	討論劇を通して、柔軟に人の発言を受け止めることができる。	ディベートを通して、自分の考えを広げることができる。	パネルディスカッションを通して、自分の考えを深めることができる。

（３）指導方法

①　事前事後の「話すこと・聞くこと」の意識調査の実施

生徒の実態に即した指導計画を立てるために事前のアンケートを実施した。その結果、３年生においては、話す順序、聞き方、声の大きさや話す速度に課題を持っている生徒が多いことが分かった（図４）。そこで、これらの課題を改善するように工夫して指導計画を立てた。授業後にも同じアンケートを用いて、生徒の変容を確認した。事前事後を比べると、すべての項目において課題点の改善がみられた。あえて言うならば、「話し手の話をうなずきながら聞いていますか？」という項目の達成度が、どの項目よりも低かった。そこで、さらに、国語科だより（図５）を作成し、その中で、聞き方の手立てを行った。

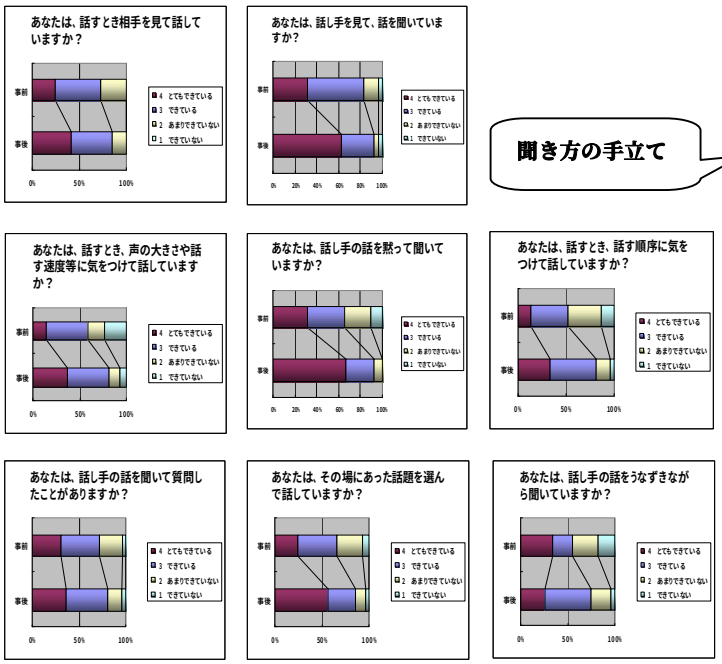
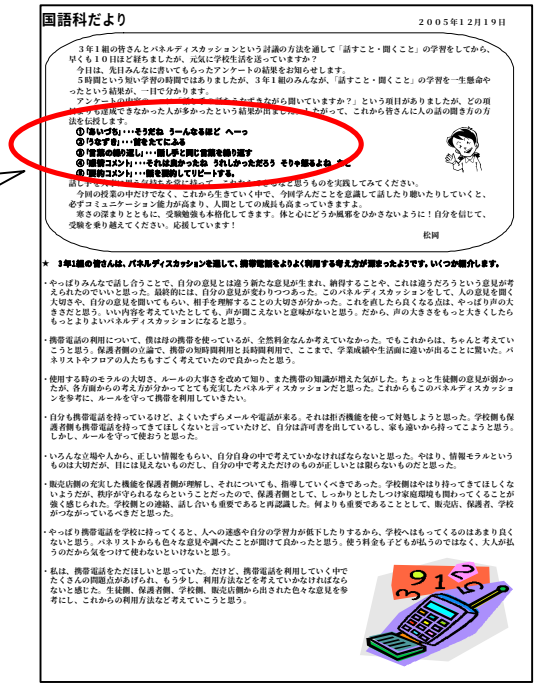


図４　事前・事後アンケート調査結果（３年生）


国語科だより　　２００５年１２月１９日

３年１組の皆さんとパネルディスカッションという討論の方法を通して「話すこと・聞くこと」の学習をしてから、早くも１０日ほど経ちましたが、元気に学校生活を送っていますか？

今日は、先日みんなに書いてもらったアンケートの結果をお知らせします。

５時間という短い学習の時間ではありましたが、３年１組のみんなが、「話すこと・聞くこと」の学習を一生懸命やったという結果が、一目で分かります。

アンケートの中で、「話し手の話をうなずきながら聞いていますか？」という項目がありましたが、どの項目の達成できなかった人が多かったという結果が出ました。だから、これから皆さんに人の話の聞き方の方法を伝授します。

①「ほいづち」・・・そう　ほね　ふーんなるほど　へーっ
②「うなずき」・・・頭を左右にふる
③「質問の仕方」・・・自し手と同じ言葉を繰り返す
④「感想コメント」・・・それは良かったね　うれしかっただろう　そりゃ困るよね　すご
⑤「総括コメント」・・・話を要約してリピートする。

話し手の話の中で、聞き手は話しを受け止めて、[illegible]と思うものを実践してみてください。

今回の授業の中だけでなく、これから生きていく中で、今回学んだことを意識して話したり聞いたりしていくと、必ずコミュニケーション能力が高まり、人間としての成長も高まっていきますよ。

寒さの深まりとともに、受験勉強も本格化してきます。体と心にどうか風邪をひかさないように！自分を信じて、受験を乗り越えてください。応援しています！

松岡

★　３年１組の皆さんは、パネルディスカッションを通して、携帯電話をよりよく利用する考え方が深まったようです。いくつか紹介します。

・やっぱりみんなで話し合うことで、自分の意見とは違う新たな意見が生まれ、納得することや、これは違うだろうという意見が考えられたのでいいと思った。最終的には、自分の意見が変わりつつあった。このパネルディスカッションをして、人の意見を聞く大切さや、自分の意見を聞いてもらい、相手を理解することの大切さが分かった。これを直したら良くなる点は、やっぱり声の大きさだと思う。いい内容を考えていたとしても、声が聞こえないと意味がないと思う。だから、声の大きさをもっと大きくしたらもっとよりよいパネルディスカッションになると思う。

・携帯電話の利用について、僕は母の携帯を使っているが、全然料金なんか考えていなかった。でもこれからは、ちゃんと考えていこうと思う。保護者側の立場で、携帯の知識調用と長時間利用で、ここまで、学業成績や生活面に違いが出ることに驚いた。パネリストやフロアの人たちもすごく考えていたので良かったと思う。

・使用する時のモラルの大切さ、ルールの大事さを改めて知り、また携帯の知識が増えた気がした。ちょっと生徒側の意見が弱かったが、各方面からの考え方が分かってとても充実したパネルディスカッションだと思った。これからもこのパネルディスカッションを参考に、ルールを守って携帯を利用していきたい。

・自分も携帯電話を持っているけど、よくいたずらメールや電話が来る。それは拒否機能を使って対処しようと思った。学校側も保護者側も携帯電話を持ってきてほしくないと言っていたけど、自分は許可書を出しているし、家も遠いから持ってこようと思う。しかし、ルールを守って使おうと思った。

・いろんな立場や人から、正しい情報をもらい、自分自身の中で考えていかなければならないと思った。やはり、情報モラルというものは大切だが、目には見えないものだし、自分の中で考えただけのものの示正しいとは限らないものだと思った。

・販売店側の充実した機能を保護者側が理解し、それについても、指導していくべきであった。学校側はやはり持ってきてほしくないようだが、秩序が守られるならということだったので、保護者側として、しっかりとしたしつけ家庭環境も関わってくることが強く感じられた。学校側との連絡、話し合いも重要であると再認識した。何よりも重要であることとして、販売店、保護者、学校がつながっているべきだと思った。

・やっぱり携帯電話を学校に持ってくると、人への迷惑や自分の学習が低下したりするから、学校へはもってくるのはあまり良くないと思う。パネリストからも色々な意見や調べたことが聞けて良かったと思う。使う料金もＦどもが払うのではなく、大人が払うのだから気をつけて使わないといけないと思う。

・私は、携帯電話をただほしいと思っていた。だけど、携帯電話を利用していく中でたくさんの問題点があげられ、もう少し、利用方法などを考えていかなければならないと感じた。生徒側、保護者側、学校側、販売店側から出された色々な意見を参考にし、これからの利用方法など考えていこうと思う。

図５　国語科だより

②　学習内容と到達目標を明示した資料の配付、確認

事前に単元の流れや到達目標(図６)を示すことで、生徒は何を学ぶかを理解し、意欲的に学習に臨むことができた。また、到達目標は、生徒が達成しやすいように分かりやすい表現で具体的に示した。

③　学習の手引きの作成

授業をより分かりやすく、具体化するために学習の手引きを作成した。相手に分かりやすく伝える方法として、発表マニュアルを例示し、具体的な話し合いの手法や聞き方の手法を手引きした。

④　ワークシートの作成

段階を踏みながら話し合いの力を身につけることを目的として作成した。また、発表原稿を作成するときに、少しでもつまずきを減らすため、段階を踏んで、自分の考えを整理しやすいワークシートになるように心がけた。また、学習指導案（図７）に位置付けた評価規準と学習活動の内容と、ワークシート（図８）の

単元の計画の流れ･到達目標（3年）

単元名	「話すこと・聞くこと」
ねらい	話し合いの目的をとらえ、問題を解決するために創造的に話し合う。
題名	「話し合いで問題を解決しよう。」

時間・日程	単元の計画の流れ	到達目標
1時間目（１１／２９）	・パネルディスカッションとは何かを知る。 ・題材についての自分の考えを、班の立場からまとめる。	・パネルディスカッションの内容を理解することができる。
2時間目（１２／１）	・題材について、各グループで話し合う。 ・役割を分担する。	・話し合いの目的をとらえ、問題を解決するための意見を一つ以上発言することができる。 ・はっきりと相手に伝わるように発言できる。 ・話し手の目を見て、うなずきながら聞くことができる。
3時間目（１２／２）	・情報収集を行う。 ・集めた資料を活用して、パネルディスカッションの原稿を書く。	・情報を収集し、伝えたいポイントを書き出すことができる。 ・集めた資料を積極的に活用することができる。
4時間目（１２／６）	・パネルディスカッションの原稿を仕上げる。	・説得力のある話し方になるように、文章の組立てや話す順序を考えることができる。
5時間目（１２／８）	・パネルディスカッションを行う。 ・パネルディスカッションを通して、自分の考えを深める。 ・自己評価や学習の感想を書く。	・パネルディスカッションに意欲的に参加することができる。 ・相手の立場や考えを尊重しながら、意見と根拠、共通点と相違点などを区別しながら話したり、聞いたりすることができる。 ・メモをしっかり取ることができる。 ・討論後、自分の考えを深めることができる。

図６　単元の計画の流れ・到達目標(3 年)

設問の一体化を図ることで、今何を学び、どのように学習すればいいのかを確認しながら授業に取り組ませることができた。

	評価規準	評価方法	評価規準			学習活動	支援
			関態	話聞	言語		（評価規準に達してない生徒への手立てを含む）
導入						・身につけてもらいたい力を確認する。 ・前時の確認をする。	・学ぶ意欲を喚起させる。
	◆話し合いの目的をとらえ、問題を解決するための意見を一つ以上発言している。	ワークシート 観察	○	○		・各班で話し合いをする。 ① 各班で、自分の意見をそれぞれ出し合う。	・ワークシートを参考にさせる。 ・各班、班長を先頭に右回りで発言させる。
展	◆はっきりと相手に伝わるように意見を述べている。	観察	○	○	○	② 司会者、計時を１名ずつ選ぶ。 ③ パネリストを１名選ぶ。	
	◆話し手の目を見て、	観察	○	○		④ 役割を分担する。	・各班でそれぞれ役

図７　学習指導案

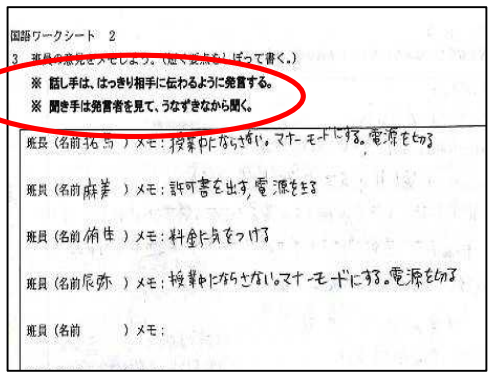


図８　ワークシート

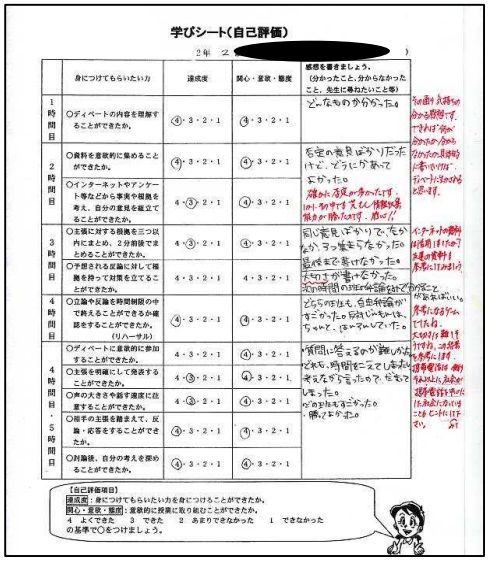


図９　学びシート（自己評価）

⑤　学びシート（自己評価）（図９）の作成

生徒自身に毎時間振り返りをさせ、また生徒の評価に対して、アドバイスや励まし等、生徒一人一人に合った適切な指導（個に応じた指導）を行った。このような毎時間の振り返りは、意欲を持続させることに効果があった。

⑥　ペーパーテストの実施

今までは、活動を中心に評価してきたが、到達目標をより定着させるために、ペーパーテストを実施した。また、３年生では、テスト勉強を含めた家庭学習が深められるように、授業内容をホームページにして立ち上げた。

⑦　情報機器の活用

授業内容を説明したり、情報収集に活用するなど、「学びから逃走」する生徒をくい止める手立ての一つとして、情報機器を活用して授業を行った。生徒たちの集中力を高め、「話すこと・聞くこと」の領域の内容を学ぶ目的や「話し方」、「聞き方」、「メモの取り方」などの方法を効果的に指導することができた。

（４）検証授業の考察

小学校学習指導要領解説国語編では、話す力の内容を、「分かりやすく、筋道を立てて話す力」と示しているが、中学校学習指導要領解説－国語編－では「論理的に話す力」と示されているように内容が発達段階に応じて変わる。ところが、検証授業の中で、「論理的」という言葉を用いて説明をしていると、「論理的」という言葉と意味を理解していない生徒が多かった。そのため、十分に「論理的」に話す活動ができなかった。「論理的」とは、相手に的確・適切に理解させるために、筋道を立てて自分の考えを組み立てることで、「論理的に話す」とは、その組み立てた考えが明確に伝わるように、相手に話すということである。

指導にあたっては、まず、指導に用いる言葉とその意味をしっかり理解させることが大切であることが分かった。そのうえで話し方を具体的に示して指導していくことで、より高い「話すこと・聞くこと」の力を身につけさせることができたと考える。

論理的に話す力をつけるためには、段階を踏まえ、時間をかけて方法を指導していく必要がある。

その方法とは、①根拠となる情報を収集・整理する　②筋道を立てて主張を組み立てる　③組み立てた主張を相手に正確に伝えるために表現の工夫をする　④相手の意見を正確に受け止めるためにメモを取ったりする、という４段階を踏むことである。これらの方法を根気強く積み重ねていくことが大切であると考えた。

また、「話すこと・聞くこと」の活動が、日常的であるために、逆に生徒にとっては、目的を持って学んだり、学習活動をすることに対して、意識が低くなる。そこで、「話すこと・聞くこと」を学習する必要性に気付かせ、生徒が意欲的に活動に取り組むように学習指導法を工夫して指導した。そうすることで、生徒は、「話すこと・聞くこと」の学習の意義を理解して授業に参加することができた。また、効果的な指導をするには、班の人数も工夫する必要がある。なぜならば、「話すこと・聞くこと」の授業実践で、生活班（一班６～７名）をそのまま学習班として用いた場合、役割が全員に行きわたらず、どうしても学習に集中できない生徒や、話し合いの課題を自分のこととして真剣に考えない生徒を作ってしまうからである。「言語活動を班活動で行うには、一班最大４名までである。この４名という数字は、司会、記録、発言者、評価する者というそれぞれの役割を交代しながら経験させることができる人数である」と安居總子氏は、日本国語教育学会岐阜研究大会で言われていた。全員参加の授業を目指し、身につけたい力をつけていくには、学ぶ内容に応じて人数や役割を考えていかなければならないことが分かった。

どれだけの生徒が、それぞれの発達段階に応じて重点を置いた到達目標に達成できたかを、到達目標達成度（図 10）として、学びシート（自己評価）とペーパーテストの結果から集計した。２年生については、他の学年に比べ、到達目標に達成している生徒が少なかった。発達段階に応じた到達目標を設定し、生徒も意欲をもって学習をしていたが、教師の手立ての不十分さが、このような結果を招いてしまったのだと反省している。ここでの２年生での反省、課題を生かし、指導計画を練り直して指導にあたった１年生、３年生では、到達目標を 95%以上達成していた。

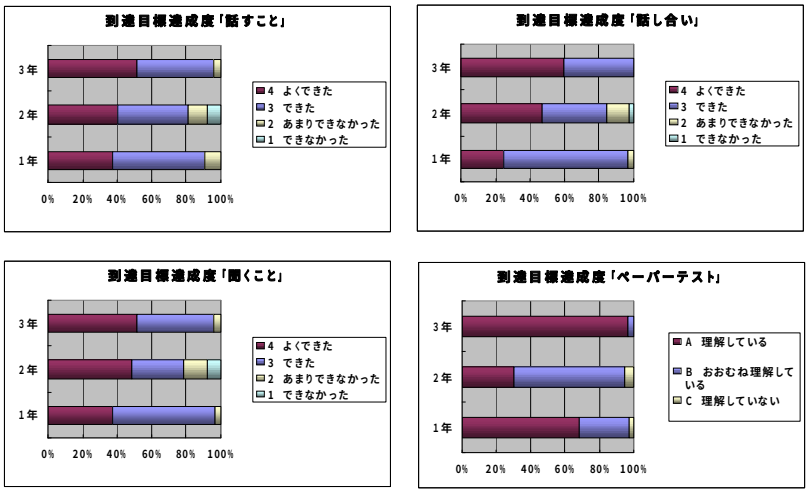


図 10　到達目標達成度

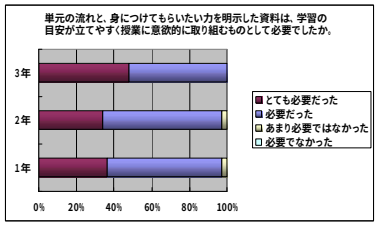


図 11　アンケート結果

以上の検証授業の結果から、「それぞれの領域の系統性を見据えて指導項目を設定し具体的な評価規準を用いることで、指導する目的が明確になり、生徒の状況が把握しやすく、その都度生徒一人一人に合った適切な指導ができるであろう」という仮説の有効性を検証することができた。また、アンケートの「単元の流れと、身につけてもらいたい力を明示した資料は、学習の目安が立てやすく授業に意欲的に取り組むものとして必要でしたか。」という質問に対して、「とても必要である」と「必要であった」と回答した数を合わせると、どの学年もほぼ 100%であった（図 11）。このことから、事前に到達目標を明示することで、生徒が「学習の目安を立てて、学習に臨むことにつながるであろう」という仮説の有効性を検証することができた。事前に練った指導計画を生徒たちに示し実践していくことは、生徒の学力を育成するうえで必要なことであると考える。

真の学びをつかませるには、系統性を見据えた指導計画と学習指導法の工夫が必要であることが

分かった。

6　成果と課題

「話すこと・聞くこと」の領域で、三年間の系統性を見据えて、三学年にわたって検証授業を行った。「三年間で何を目指し、今は何を身につけるのか」という段階を踏んだ評価規準を、各学年ごとに到達目標として設定することで、指導内容が明確になり、評価規準と指導内容、そしてワークシートの設問に一貫性を持たせて指導を行うことができた。生徒たちは、本時どのような力を身につけるのかという到達目標を理解することで、今何を学び、どのように学習すればいいのかを確認しながら授業に取り組むことができた。このように三年間の系統性を見据えた評価規準をもって学習指導ができたこと、そして、そのことにより、生徒の取り組む姿勢に改善が見られたことは、確かな国語力を育成する視点からも意義深い成果であった。

課題として、「話すこと・聞くこと」の力を育成するにあたっては、国語の教科で授業時数を確保し、計画的に実施することは言うまでもないが、国語の授業だけに限らず、学校全体で、意図的・計画的・組織的に取り組む必要がある。生徒の「伝え合う力」を伸ばすためには、日常の指導の中で、発音、発声の方法を身につけることをはじめとし、相手の話を聞く、話す内容をまとめる、話を進めるなど、様々な活動の場を設けて指導することが、「伝え合う力」を効果的に高めることにつながると考える。

また、「話すこと・聞くこと」の能力を効果的に身につけさせるために、具体的な話し方の方法や聞き方の方法を検討していき、その内容を「身につけたい力一覧表」の各学年に盛り込んでいくと、今以上の具体的な指導計画になっていくと考える。

国語という教科は、小学校、中学校で学ぶ内容が螺旋的であり、発達段階に応じた指導、いわば、質の高まりを目指した指導を行っていくという特徴をもっている。そのため中学校で「話すこと・聞くこと」を指導するにあたっては、小学校での指導の系統性を充分に把握する必要がある。この方法をより具体化するために、中学校三年間の系統性だけでなく、教科指導における小中の連携を今以上にはかり、小学校からの一貫した指導が必要である。

さらに、生徒たちが教室の中で生き生きと自分の考えを積極的に表現できるようになるためには、教師自身の生き生きとした話し方や正しい言葉遣い、豊かな表現力なども重要になってくる。教師自身もコミュニケーションの実践を多く踏むことが大切である。また、教科書に出てくるスピーチや討論会を単純に消化することに終始せず、国語科として、話し方・聞き方の方法を分かりやすく指導することが大切であり、またその方法を研究していく姿勢こそ最も忘れてはならないことである。

今後「学びから逃走」する生徒を教科指導でくい止めることができるように、得られた成果をさらに伸ばし、新たな課題を解決するために研鑽を積み重ねていきたいと考えている。

〈主な引用・参考文献〉

（1）小学校学習指導要領解説　国語編　（文部省　平成 11 年 5 月）
（2）中学校学習指導要領解説－国語編－（文部科学省　平成 11 年 9 月　平成 16 年 5 月一部補訂）
（3）『新しい国語』教師用指導書 1～3 年（東京書籍　2002 年）
（4）『音声言語指導大辞典』高橋俊三〔編〕（明治図書　1999 年）
（5）平成 16 年度　研究集録 197 集『国語科における基礎・基本の習得をめざした指導の工夫』
相模原市立総合学習センター
（6）『中学校国語「話すこと・聞くこと」の扉をひらく』－新しい学びの実践研究－全日本中学校国語教育研究協議会〔編〕（三省堂 2002 年）
（7）『大村はま　やさしい国語教室』大村はま著（共文社　平成 17 年）
（8）『大村はま　日本語教室　日本語を鍛える』大村はま著（風濤社　2002 年）
（9）『話すこと聞くことの活動事例集』声とことばの会（明治図書　2002 年）
（10）『「学び」から逃走する子どもたち』佐藤学著（岩波ブックレット No.524　2005 年）